

2011年
11月24日
木曜日

藤田友尚 教授（フランス語・フランス文学）

アジスとサル・フランスの二人のムスリム

2011年9月、公道でニカブを着用していたとして、二人のムスリム女性に罰金刑が言い渡された。公共空間で顔や全身を被うヴェールを着用することを禁止する法律に抵触する、それが理由だった。ヨーロッパで最も多くムスリムを抱えるフランスは、徹底的な「政教分離（ライシテ）」を国是とし、それを共和国の価値としている。露骨な宗教的シンボルを取り締まることで、イスラームが共和国の価値を危うくする可能性を排除しようとしているのだ。だが懸念されるのは、国内に500〜600万人というムスリムを抱え、今や総人口の10%にまで迫ろうかというイスラーム勢力を前に、明らかにフランス社会は苛立ち、不寛容になっていることだ。

イスラームへの風当たりが増すにつれて、私はフランス留学中に友人だった二人のムスリムを想わないで

はいられない。一人はマリ共和国のサル、もう一人はイランのアジスだ。慣れないフランス生活の手ほどきしてもらった彼らの存在は、当時の私にとってどれほど心強かったかわからない。

1979年、イスラーム法学者としてカリスマ的存在であったホメイニが最高指導者となり、現在のイラン・イスラム共和国が樹立した。それによってパフラヴィー朝のシャー²、モハンマド・レザーは失脚、亡命を余儀なくされた。このシャーの軍隊の将校だったのがアジスだ。彼もまたシャーの運命と同じく、亡命状態でフランスにやってきた。口ひげがよく似合う男で、中肉中背のがっちりした体格がいかに軍人らしかった。

アジスはフランス語が上手で、どうしてそんなにフランス語が巧いのと尋ねると、ペルシャ語に比べてフ

ランス語は簡単だから、と拙いフランス語しかしゃべれなかった当時の私にはがっかりするような返事しか戻ってこなかった。生活費にさえ困ることがあったようで、哀れな表情で金を貸してくれないかと相談されたこともあった。革命で祖国を追われた身だからだろう、個人情報交換には極めて慎重だったことが思い出される。今フランスでどうしているのか、消息は知らない。

他方、サルは長身で堂々とした体格を持つ黒人で、野性的で精悍な顔つきだった。アフリカの民族衣装ブブをいつも身にまとっていた。銀糸の刺繍が入った黒と紺を基調とする見事なブブをまとったサルは、部族の長でもあるかのように偉大に見えた。私は彼と合うたびにブブが欲しい、と頼んだのだが、そのたびに大笑いされるだけだった。ドゴン族の玩具のような住居や、廢墟となった

古都トンプクトウの泥土でできた巨大な宮殿への興味を植え付けられたのも、サルからだだった。彼は首都バマコに残してきた二人の妻たちの元に戻って、役人の仕事を続けているはずだ。

習俗・歴史・文化的背景も異なる二人ではあっても、彼らは私に強烈な印象を残した深い友人たちだ。フランス社会とイスラームとの関係を知れば知るほど、彼らの置かれていた立場がいかに複雑だったか、今になってやっと理解できるようになった。イスラームを短絡的に野蛮やテロリズムと結びつける無知や傲慢さがフランスにないわけではない。2012年は大統領選、新しい大統領がムスリムをどうフランス社会に「統合」するのか、注視したい。■

1 ムスリムの女性が着用するヴェールのこと。目以外の頭、顔、身体全体を被う。
2 「王」あるいは「皇帝」を指す称号。